

木曾三川下流域(長島輪中など)における

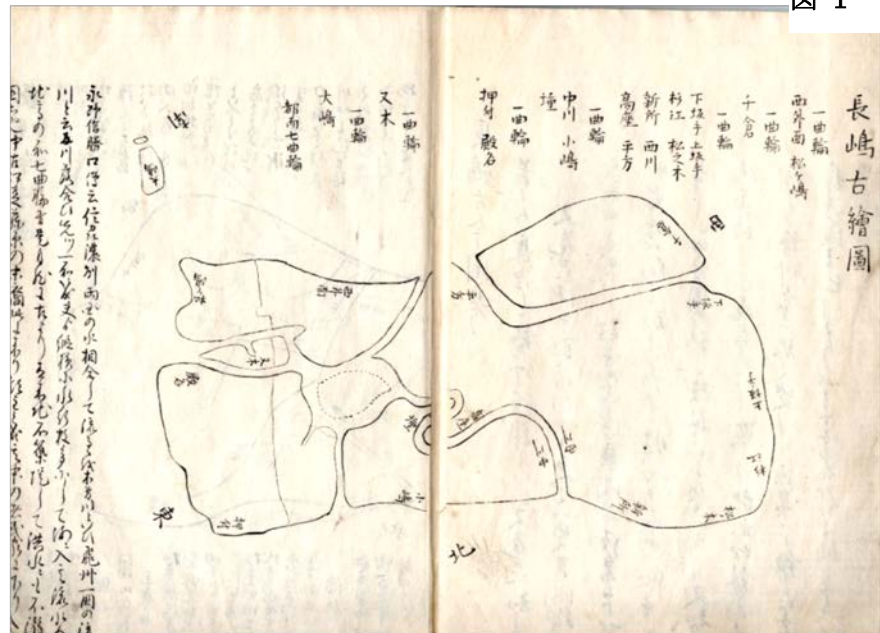
輪中に関するいくつかの提案

輪中がいつ形成されたのかは、種々の説があるものの定まったものはない。土地形成の上から延べれば、木曾三川の土砂が堆積したことによって丘陵台地の麓に扇状地ができ、その先に半島状の堆積が始まる。その前後に島状の陸地が形成されることによって、輪中が形成されていくが、これらの土地形成において堤防が人為的に作られたか。もしくは自然堤防を利用して耕作地を守るための河川等の水の流入を防いできた。この時点において大規模な集落形成が行われ、集約的な農業生産が行われてきたことは間違いない。この段階において輪中が形成されたかどうかは、輪中の定義そのものを精査しなければならず、輪中形成の基本的要素の堤防や集落・共同体の側面から考えてもこれらの生産地が輪中かどうかをあてはめることができないし、時代的にはどの時代に当てはまるかはわからない。場合によっては縄文期の海進現象が終わったのちには土地形成が始まっており、比較的早い時代から開発が進んでいったものと考えられる。その後の弥生期においては広大な農耕地、特に水田地帯が形成されたと考えられるものの遺跡の分布から見ると現在の海岸線よりのかなり奥まで伊勢湾が入り込んでいたらしい。文献からは奈良期には大垣あたりの治水が実施されていたようであるし、長島に限って言えば平安後期から鎌倉期の「明月記」や「東鑑」には荘園が開発されている。

一般的に輪中の土地形成は、少なくとも江戸時代初期には形成されたということには、間違いない。これは天正期の地震により濃尾平野が数メートル沈降したことで、海岸線が内陸部にまで進行し、翌年の洪水で木曾三川の流路そのものが変わってしまっている。このため、天正地震以前にも陸地の形成若しくは初現的な意味合いでの輪中の形成が進んでいた地域においても、いったん水没し、再び土地形成が行われていったものと考えられる。その時間の経緯が、1586年の洪水によるものから進み始め、江戸時代初期において完成に近づいていったものと考えられる。しかし慶長年間から慶安年間にかけては頻繁に地震や水害等が起こり、長島での輪中の形成については、各大字に集約される土産神の成立年代が慶安年間(ほとんどが慶安3年)とされることが多いから、一通りの土地形成の完成は慶安年間になり、この時代に輪中が成立したことになる。なお、この時代以前にも輪中は成立していたものと考えられるが、これ以降の輪中に関しても、土地形成が完了すると同時に、集落が形成される。この場合

図 1

の集落は、土地
開発イコール
新田開発であ
り、田畑を開発
するためのもの
であるから
当然、輪中内の
集落は存在せ
ず、集落は地形
上最も高いと
ころであり、水
田としての土
地利用が不可
能な場所であ



る輪中堤防の天井部分に立地することになる。そのため集落は狭く長いところのある為、列状に形成されていく。長島古今図考記(図 1)における輪中の形成を表しており、現在の大字程度の小輪中から数個の大字が集まった複合輪中が合計で七輪中として図化されている。これらの七輪中に関しては現在の地図においても確認することができ、南部輪中においては集落を堤防が囲むのではなく、堤防上に集落が立地していることになる。この図を現在の集落にあてはめてみると西川、中川、小島、間々、高座等の旧楠村の集落は堤防上に立地していることになるがそれぞれは独立した輪中を形成していたと考えられ、室町期には10輪中以上の小輪中が存在していたものと考えられる。また、西外面と松ヶ島で一輪中を形成しており、又木で一輪中、押付と殿名で一輪中を形成しているが、それぞれの中央部の線が入っているのは、開発時期の違いからと考えられる。つまりこの図は江戸時代の初期慶長年間から元和年間のものであり、正確には元和6年に長島藩主が菅沼家から松平家に代わり、桑名藩松平家によって長島全体での一輪中が完成したとの記述があることから、長島が七輪中となったのは、元和6年以前であり、その中で数個の大字が集まったものはそれ以前の形成となり、場合によっては室町期にまでさかのぼると考えられる。実際にはこれらの集落からは山茶碗等の出土が見られ、室町期の集落跡である可能性は非常に高いのである。

図2は上記の長島古今図考記に書かれているもので、縦横の流れ所どころを築き留め長嶋一曲輪になさしめたまうとあり、長島全体を一輪中に築き留めたときの図である。元和年中という記述があることから、1650年代



図 2

のことであり、この時点において長島輪中は複合輪中化され、長島輪中となっている。図2の小嶋・高座・平方を結ぶ線は堤防であり、中堤として長島輪中の上郷と下郷(後の楠村と長島村)に隔てられている。この堤防は長島輪中の駆け回し堤防と同じ高さまで積み上げられ、共同体組織としても実際の取水や排水も分けられている。しかし、この時点での長島輪中が連続堤による懸け回しの堤防が連続堤であったかどうかは定かではない。むしろ長十郎新田付近から揖斐川に向かって排水していたことは確かであり、現在の長島の排水系統もほとんどその時の姿を伝えていることから、取水と排水も同じような系統で行われていたと考えられる。実際に新所から上郷全体に用水路がめぐらされていることを見て取ることができるが、昭和40年代まで長島輪中の取水はこの場所から行われており、上郷の排水も平方の北と千倉の間から行われていた。(現在の排水機場もほぼ同じ場所にある)江戸時代中期に書かれた長島細布によれば、**当村西新田**というは。答えて、寛永二丑年開癸する也。前には起畑河田にして堤なし。然るに同年平方村農夫□□□□□□ 開癸し西新田と号する也。定勝君兼領の後、堤をこわすなり。とあり、平方村の西には堤防が築かれなかったと考えられる。

図3は明治時代の初めに描かれた平方村絵図である。長島輪中の中央部に位置し、この時代においては図の右側が揖斐川である。図の下方、左右に延びている線が、上記の上郷と下郷を分ける中堤である。その右突き当りが揖斐川堤防と考えられる。この図からは、江戸期にはすでに堀田が形成されていること。また、意図的に揖斐川堤防が一部しか描かれていないのか、あるいはなかったのかは判明しないが、平方村は西から順に見ていくと、揖斐川に面した自然堤防上に数件の家が連続して建てられたり、大量の水を必要としない畑が作られている。そして、堀田を挟んで神社を中心とした集落が形成されている。その集落の隣には再び堀田が作られている。集落形成順から考えると図の中央部の集落が揖斐川の自然堤防上に形成されることで、東の堀田が作られる。その形成が終わると新たに西に自然堤防ができることによって、列状の集落が形成され、その間に堀田が作られた。中央部の集落は西の列状の集落が形成されることによって、揖斐川の川水の直接の影響を受けることがなくなったため、自然堤防を突き崩して宅地の面積を広くしていき、長島輪中の中では数少ない列ではなく、面に広がる集落形成が進んでいった。しかし、この図の最も特筆すべきことは、揖斐川からすべての屋敷に水路が続いていることにある。つまり、直接他地域から、舟で運搬移動ができたということである。明治時代になっても連続堤ではなく、輪中内の水路の水位と揖斐川の水位が同じであるというこ

図 3



(下が北)

とになる。揖斐川の水位が上昇すると堀田部分が遊水地となり、家屋への浸水を食い止めていたが、遊水池が満水になると家屋への浸水が始まる。この時には、家屋の戸をすべて開け放して、増水した川水が家屋の中を通り抜けるようになっていた。そしてこの集落ではほとんどの家に水屋があり、家屋が浸水している間は、水屋で避難生活を送っていた。因みに家屋を川水が通り抜ける為、家屋の周りには屋敷林があり、流木等が当たらないようになっており、冬季には防風林の役割も果たしていた。なお、当時は薪や柴を確保することも日常生活において重要であり、ほとんどの農機具も自家製であるため、この屋敷林は大切に守られてきていた。特に水屋には多くの土が使われたことにより大きな木が植えられており、この木から得られた薪は正月などの慶事に使われた。このように屋敷林を形成していくためには、この地域においては、石垣ではなく、ほとんどが土盛りであり、土砂の採取は揖斐川からの私的な浚渫によって賄われてきたのである。また、集落の周りが堀田であったことやその地域全域に高低差がなかったことから、屋敷と田へは舟が移動で使われ、場合によっては揖斐川までも屋敷から直接舟で行くことができた。このため舟が運搬ばかりでなく移動の手段としても使われたため、どこの家にも舟があり、玄関先には舟が繋がれていた。そして、浸水時には水屋の大きな木は、貴重な舟をつなぎとめる働きもしたために舟つなぎの木とも呼ばれていた。

このようなことから、明治改修以前の長島輪中の平方村には揖斐川に対しての連続堤はなく、また、石垣を積んだ家もほとんど存在しなかった。また、浸水時に避難をするという概念もなかったため、避難場所もなく、軒先や水屋に舟をあげておく習慣もなかったといえる。こののち明治改修によって木曾三川が分流されると同時に、近代治水(西洋治水)が行われることで、連続堤が形成され、塚が水圧に耐えることができるような樋門や樋管となることで、輪中そのものの概念や堤防に関しての概念も変わり、現在のような堤防によって住空間と河川との仕切りが作られて、浸水する水防から堤を守る水防へと変わっていった。